

2016年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 社会学部 教授 岡田弥生

研究課題： T.S. Eliot の自意識の変容—F. H. Bradley 哲学から読み解く

研究期間：2016年4月1日～2017年3月31日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

アメリカ文学における主たる研究対象は T.S. Eliot (1888-1965) と William Faulkner (1897-1962) であります。Jeremy Taylor の影響という独特のテーマが与えられて以降は Faulkner 研究に力点を置いてきた。そして 2008 年に与えられた特別研究期間において、これまでの研究では言及されなかった 17 世紀の神学者 Jeremy Taylor の影響からユダヤ神秘主義カバラにまで言及したユニークなフォークナー論、『ウィリアム・フォークナーのキリスト像—ジェレミー・テイラーの影響から読み解く』（関西学院大学出版会、2010 年）を出版することができた。今回の特別研究期間ではもう一方の研究対象である T.S. Eliot の出版原稿を纏めることができた。

研究経緯に関しては 2015 年夏一部個人研究費を使って渡英し、University of Cambridge Darwin College に滞在した折に、資料を得たことを機に、修士論文で手がけた独自の研究課題である F.H. Bradley 哲学解釈から読み解く Eliot の自意識の変遷を纏めたいと強く希望するようになった。

これまでエリオット研究において Bradley 哲学から Eliot 作品全容を読み解く試みはほとんどなされてこなかった。しかし Anglo-Catholicism に改宗して 3 年後も Eliot は Bradley の弟子であると公言したほど Bradley 哲学の影響は Eliot において強烈であり、Anglo-Catholicism への道も Bradley 哲学から辿ることができる。ただ Bradley 哲学に関しては曖昧模糊として全容を把握するのが困難であることが最大の難関である。

2016 年 5 月には American Literature Association に参加し、Eliot に関しても最新の研究発表に接することができた。また夏には 2002 年学院留学の折、一年かけて博士論文を書き上げた地であり、何度も資料収集に訪れている Cambridge で、一ヶ月 Down College に滞在し、執筆中の T.S. Eliot に関する資料収集をすることができた。そして不断にエリオットが影響を受けたブラッドリー哲学についての資料を University Library で得ることができ、難解なブラッドリー哲学を多角的に知ることができた。特に King's College のアーカイブスで Eliot 遺作品に当たることができたことが貴重である。さらにエリオットがアングロ・カトリックに改宗し、洗礼を受けた教会、エリオットが葬られている East Coker の教会、エリオットの詩の舞台となった Burnt Norton を訪れることができたこと。エリオットの最後の詩の舞台である Little Gidding を訪れ、当教会で聖日礼拝に参加し、アメリカ人エリオット研究者と交流を持ったこと等、数え上げればきりが無いほど徹底してエリオット一色の研修ができ、手がけている執筆に反映することができた。

特別研究期間とはいえ、ゼミ、卒論指導、言コミセミナーなど週に 1-2 日は出講していたが、その他の日にはほぼ終日エリオットと向き合い、その結果 2018 年度春出版を目指して『「眼」から「薔薇」へ—F.H. Bradley から読み解く T.S. Eliot の自意識の変容』（300 頁）を執筆

することができた。

博学なエリオットを纏め上げるには自らの限界を覚えざるを得ないが、エリオットにはずっと執着があった。日本におけるエリオット研究の第一人者の一人高柳俊一氏は「我々は、哲学に対するエリオットの関心が救済の問題を契機として、救済の認識論的意義を追求するものであり、それが彼の詩全体の感情的・知性的雰囲気を形成したとするボルガン女子の指摘を、よく考えてみる必要がある。なぜならば、おそらくここに、...より広い見地に立ってエリオットの宗教意識を研究するきっかけがあると思われるからである」とその著『T. S. エリオットの思想形成』の最後に述べているが、本書はその要求に応えるものであると思われる。

ブラッドリーから得た絶対者への渴望から、エリオットはダンテ、アンドルーズ、新トマス主義の影響によりアングロ・カトリックにたどりつき、受肉の教義に身を委ね、信仰の行為によって新しい眼を得て、絶対者のもとで整合的かつ調和的に全体の中に位置づけられた自己を得、執拗にからみつく罪や不安にもかかわらず存在への勇気に掛ける生き方へとたどり着いた。その苦闘はどこまでも若い時の苦悩の中ブラッドリー哲学に見た絶対的観念論、「首尾一貫性と包括性」を生きた経験とするためのものであったと解釈できる。現象は変わるが、それを凌駕する真理は不変であることを実証する。

終わりになりますが、このような貴重な研究期間を与えてくださいました学部、学院に衷心より感謝を申し述べます。